

Title	Roderick Random における二重逆転構造
Author(s)	服部, 典之
Citation	Osaka Literary Review. 22 P.65-P.77
Issue Date	1983-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25587
DOI	10.18910/25587
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Roderick Random における二重逆転構造

服 部 典 之

I

冷酷な世間、彼の最初の劇 *The Regicide* を遂に上演しなかった世間に対する激しい憤りと、処女作を上梓することにあたってのなみなみならぬ気概を持って、Smollett は彼の決意のほどを *Roderick Random* の序文に書きつけている。

我々は、この作品の構造を考えるにあたって、Smollett 自身がどの程度作品構成に対して意識的であったかを見るために、まずこの序文を検討しなければならない。

この中で、彼は“Romance”を攻撃した後、その欠点を是正した作家の一人として Le Sage を挙げるのだが、それにもかかわらず、その代表作 *Gil Blas* について次のように苦言を呈している。

The disgraces of *Gil Blas*, are for the most part, such as rather excite mirth than compassion ; he himself laughs at them ; and his transitions from distress to happiness, or at least ease, are so sudden that neither the reader has time to pity him, nor himself to be acquainted with affliction. — This conduct, in my opinion, not only deviates from probability, but prevents that generous indignation, which ought to animate the reader, against the sordid and vicious disposition of the world. 1)

Gil Blas を批判する形でここに提出されている彼の主張は、次の三点に絞られる。

(a) Smollett は、主人公の苦境から幸福への転換が自然に受け入れられるものでなくてはならない、と言う。転換 transitions という単語が複数に

なっていることは、幸福から苦境への逆の転換も存在している、ということを示すので、要は主人公の境遇の変化が自然でなくてはならない、ということである。

(b) (a)が直接作品構成に関係しているとすれば、(b)と次に挙げる(c)は読者の反応と繋がりを持つ。読者は、主人公の窮境に同情し、ひいては彼の幸運を共に喜ぶことを期待されている。我々は Damian Grant も指摘するように²⁾長年 Roderick と別れていた valet の Strap が作品半ばで彼の冒険の数々を聞く時の態度で Smollett の書く Roderick の物語を聞かねばならない。

During the recital, my friend was strongly affected, according to the various situations described: He started with surprised, glowed with indignation, gaped with curiosity, smiled with pleasure, trembled with fear, and wept with sorrow, as the vicissitudes of my life inspired these different passions; (p. 253)

つまり、小説は歓喜と悲嘆という対極にある気分到我々が感情移入することによって進んでいく、ということになる。

(c) Smollettの世間に対する怒りを、我々読者は共有しなければならない。主人公にとって世界は二分されており、味方から成る心理的には内側の世界に対して、敵である、対抗すべき外的世界が対置されている。*Random* が, picaresque であるかどうかの議論はさておき, John M. Warner が picaresque 小説について指摘したことは, Smollett の小説においても正しい。

There is a tangible social world here [in *Lazarillo* or *Gil Blas*], yet the picaro exists as a separate, isolated consciousness within that world. There is a disjunction between the world outside and the subjective world within.³⁾

主人公たちの戦いは、悪意を持った世間に対するもので、彼の抱く目的

地は、内的世界が、何ら障害物を持たない状態で確立された地点である。この二つの世界の対立が完全に主題と関わりあって発展していく過程を見るためには、第二作 *Peregrine Pickle* を待たねばならない。

以上の主張を総合して、その作品論を *Roderick Random* に応用してみよう。Smollett の企図していた構図は、主人公 Roderick が世間との関わりを軸に、幸運と不運に交互に遭遇しながら冒険の旅を続け、我々読者は彼の自然に変転する運命を共有しながらその旅を追いかけていく、というものとなる。

この序文だけを見ても、Smollett が作品全体の構成などに対してかなり意識的であったことが窺える。彼の思う通りの構成が実現されているなら、Kahrl の言う “a succession of loosely linked episodes”⁴⁾ の中にも十分 link は見られることになろう。また Walter Allen のように episode の累積効果より個々の episode を重視する⁵⁾ にしても、あまりに極端に走るなら作者の意図の重要な部分を見落とすことになろう。

無意識のレベルにおいても、Smollett は後年 *Sir Launcelot Greaves* という英国初の連載小説で、現在に至るまで使われているあの手法、つまり事件の結末を隠して次回の連載に読者の関心を繋ぐ〈次回に続く〉を発明したが、このような、読者を引っばっていく story-teller としての本能のようなものを持つ彼が、その同じ本能によって処女作を構築している、とは言えまいか。

さて、作品の中に実際に実現されている構成の話に移るが、簡単に言うなら、*Roderick Random* の全体は作者の意図通り、順序よく起こる幸運と不運の交替によって作られている。*Roderick* の伯父 Bowling の言う単純な人生訓にある、人生は航海であって順風の日があるかと思えば次には嵐が来る (p. 223)、といった考えを具現したような構成である。

この単純な構成に初めて効果的な言葉を与えた学者は、Robert Alter と Paul Fussell であった。Alter は主人公を *picaro* と考え、彼の人生は、一方では経験を楽しむことで、また他方では逆境によって性格づけられてお

り、それに対応する心理的領域は、それぞれ無頓着さと怒り、という対立する極にあるものである、⁶⁾と言う。また Fussell は、旅の観点によって小説を考え、そこに喜劇的、もしくはアイロニックな逆転のパターンを見る。

It [the pattern of comic—or ironic—reversal] consists of two elements betokening in their way the perpetual dualistic rhythms which introduce a kind of moral order into the continuum of human experience. We have first a protracted but smooth ascent to some height of felicity or optimistic perception; this condition then precipitates a sudden, surprising reversal, a rapid descent into perception or comic disillusion—the two being very much the same thing. ⁷⁾

二人の視点は異なっているが、期せずして同じ時期に、同じ事実に着目したのであった。後者を承けて、フランスの研究者 G. Boucé は、数年後、画期的な *The Novels of Smollett* において、Smollett の小説の中に “the very unity of moral life with its alternating peaks and precipices”⁸⁾ が存在することを明言した。

ただ、もしこれほど単純な構造であるなら、*Gil Blas* の中でもそれは十分見られるだろう。⁹⁾従って我々の興味の中心は、この単純な絶頂と墜落の交替する構造を、自然に読者に受け入れられるようなものにするために Smollett が用いた装置はどのようなものであったか、ということになる。それが二重逆転、とでも呼ぶべきパターンである。

II

Roderick Random の父は、貧乏な女、つまり、Roderick の母と結婚したことで、gentleman である金持ちの祖父によって勘当され、そのために彼は悲惨な少年時代を送る。父は失踪し、母は死に、頼る人間は伯父の Bowling のみ、Bowling の破産後の生活手段は、愚劣な外科医の徒弟として働くことのみである。このような暗い生活に嫌気のさした彼は上京する決意を固め、道中偶然出会った旧友 Strap と様々な冒険をしながらロンド

ンまでやって来る。

最初は田舎者丸出しのへまばかりやっていた Roderick は、都会の生活に徐々に慣れてくるに従って傲慢な気持ちをふくらませていく (p. 104)。雇い主の娘の愛情に応えず肉体に応えることで自己の立場をよくする術策を身につけたり、彼女の情夫を完膚なきまでこらしめた彼は、自分への自信をすっかり固める。

I now began to look upon myself as a *gentleman in reality*; learned to dance of a Frenchman whom I had cured of a fashionable distemper; frequented plays during the holidays; became the oracle of an ale-house, where every dispute was referred to my decision; and at length contracted an acquaintance with a young lady. . . . (p. 108)

長く続いた彼の暗黒の生活の末に訪れたこれが、最初の上昇点である。読者は彼と共に気持ちを膨らませるが、どこかでひっかかりを感じる。この上昇は Roderick の考えるように現実の (in reality) ものというより心理的なものではないか。同じ場面で彼は、あの阿呆のように忠実な Strap が嫌がるにも構わず、ある紳士の従者としてフランスに行かせる。

I [Roderick] was even ashamed to see a journeyman enquiring after me with the familiarity of a companion.” (p. 108)

彼の道徳は都会の毒に汚染されてしまっているのだ。彼は外面では高い地点に上がっているが、現実には墜落している。

上昇は次の場面の墜落に繋がる。次の章 (xxi) で早くも彼の敵 Gawky の陰謀によって彼は主人の家を放逐される。これを言いかえると、内的墜落が次の場面で顕在化して、実際の境遇が落ち込むということになる。金も評判も友も失った彼は思う。“Thus I found myself, by the iniquity of mankind, in a much more deplorable condition than ever.” (p. 114) 我々読者は、共に大変なことになったと感じながらも、彼のようにその責任を人類の不正さのみにおしつけられない。彼のその直前の道徳的墜落を知っ

ているだけに、やはりそうなったか、と思ってしまうのだ。Roderick の不幸は偶然に起こったが、我々の心の中では、前の段階の道徳的墜落と次の外的墜落は因果の鎖で繋がっている。

しかし、この窮境に陥ることで彼はかえって道徳的良心の方は取り返す。彼は、隣りに住んでおり、飢えで瀕死の状態にいた女性を自分の乏しい金で救う。彼は自らが苦しい目に遭うことで慈善 (charity) と寛容 (generosity) の心を思いだす。つまり、この外的な墜落はその中に道徳的な上昇を含んでいるのだ。外面と内面は同じく対極にありながらも、その関係は先ほどのものと全く逆になっていることに注意したい。

さて、我々は内的な生活と外的な生活が一致した時に安定を得るのであって、内面を隠したり、偽ったりする、もしくは外的な自分の状況にそぐわない内面を育てたりすると、いつか破局を迎えるものだが、Roderick の破局もそれに類するものだと言える。

主人公が常に相反する内面と外面を持つために、破局を予感させるような不安定な感じ、不確定な雰囲気が小説全体を覆っている。この不安定感も、読者に次に何が起こるだろうと思わせる効果の一面であろう。不安定さが自らの圧力に耐えきれず自爆作用を惹き起こし、次の逆の不安定さを形作っていく、というのが、この小説の基本的構造だと言える。

徐々に築かれた幸運は Fussell も言うように一瞬にして崩壊するが、不運が償われるには多少の時間を要する。小説の中央部での上昇を体験するまでには、Roderick は悲惨な軍医補佐としての海上生活を送らなくてはならない。

小説の中央部に D. Brooks の言うような数秘学的意味がある¹⁰⁾かどうかは別にしても、Smollett において、中央部が小説全体で happy end を除外した最も高い上昇点になることが多いのは事実である。ここで Roderick は数々の悲惨さの記憶を背負った船 Thunder を後にして、そこで偶然に旧友たちに出会い、たいへんな歓待を受ける。多額の金や品物のプレゼントですっかり気分が高揚した彼は、自分についてこう語る。

Being thus provided with money and all necessaries for the comfort of life, I began to look upon myself as *a gentleman of some consequence*, and felt my pride dilate apace. (p. 206)

我々は長い陰惨な描写から解放されて、この上昇が、彼の慈善や悲惨さの中で威厳を保ったことに対する報酬であるように感ずる。外的上昇は前段階の内面に帰因しているのだ。

同時にここで注目すべきことは、彼が上昇したと感ずるのは、前の上昇の時と同じく、「紳士」という地位を取り戻したこと、として意識されることだ。彼は祖父によって不当にも奪われた「紳士」という生まれながらの権利を奪回しようとして常にあがく。

この中央部に関して Boucé が “Finally, in order that the hero's fall should be harder, Smollett arranges a relative apogee for him before precipitating him down to an absolute perigee”¹¹⁾ と言うのは技法の観点から正しい。しかしここで「相対性」より更に大きな問題は、直後に墜落を伴う外的上昇は、この小説において一つのパターンになっているということである。

この場面上昇に内包される下降要因は、Thunder での最大の仇敵 Crampley が彼の乗り込む船上で上官をしていることと、それにも拘泥しない Roderick の *picaro* なみの無頓着さ (*insouciance*) である。航海の最中、Crampley と決闘沙汰を起こした彼は、その際中大勢の不意討ちをくらい北イングランドの浜辺に捨てられる。

彼はここで偶然雇われることになった家の娘 Narcissa に一目惚れし、短い上昇を体験するが、所詮は召使いの身である。自分の学識をひけらかすという傲慢さも手伝って、海賊に襲われた Roderick はフランスに拉致され、そこでまたもや捨てられる。

フランス軍の一兵卒として働いても彼の悲惨さは増大するのみ。最早着る物も食べる物もほとんどない。ここで彼を支えるのは、自分はこのような境遇に本来墮ちるような人間ではない、れっきとした紳士である、とい

うプライドである。

彼は専制的君主を崇拜するフランス兵を嘲笑する。そしてイギリスを弁護して “those insurrections of the English were no other than glorious efforts to rescue *that independance which was their birthright*” (p. 246) と言う。彼はこのように底辺を這いずる生活をしても「紳士」の身分と同様、個人とその独立を重んずる気持ちを放擲しない。一兵卒に対する「紳士」、「隷従」に対する「独立」という現実拮抗する内面を持つことで、彼はある日偶然、出世して小金を貯めこんだ Strap に再会することができる。

Strap の貯めた 300 ポンドを受け取り “[Roderick’s] brain was almost turned with this sudden change of fortune”. (p. 254) 小説中三度目の大きな上昇を味わい歓喜する Roderick に Strap は fortune-hunting を熱心に勧める。

I [Strap] see none [no push] so likely to succeed as your appearing in the character of *a gentleman* (which is your due) and making your addresses to some lady of fortune who can render you *independant* at once. (p. 255)

Roderick は即座に承知する。「紳士」と「独立」の二語は彼の心の扉を開ける〈開けごま〉なのだ。しかし明らかに、この計画は道徳的下降を含んでいる。紳士であるからといって彼は金持ちの女性を欺く資格を得たわけではない。

予想通り、彼の計画は全くうまくいかない。おまけに、彼の政治的パトロンが同性愛者であって、彼への援助の動機がよこしまなものであったことを知るのだ。

[This piece of information] *precipitated* me [Roderick] from *the most exalted pinnacle* of hope to *the lowest abyss* of despondence, and well nigh determined me to take Banter’s advice, and finish my chagrin with a halter. (p. 313)

この後は、Narcissa との再会の場面を除いてひたすら下降のみである。その時だけは、“[He was] *elevated* above every other consideration.” 彼は恋人と愛を確かめあうが、彼自身は困窮の極みにある。Narcissa の兄は二人の仲に気づき彼女を連れ去る。彼の不幸は Smollett 的クレッシェンドを見せて増加し、二次曲線を描く。その頂点は刑務所である。Roderick は中傷罪で Marshalsea に入れられ、ここで全篇最後で最大の墜落に呻吟することになる。

最後の、というのはつまり、ここで *deus ex machina* が現れ、すべてを解決するための端緒を開いてくれるのだ。商売に成功した伯父の Bowling である。“I [Roderick] was utterly confounded at *this sudden transition* which affected me more than any *reverse* I had formerly felt.” (p. 358)

小説の残りの部分において、彼は小説の前半で失ったすべてのもの—「紳士」という地位、友人、金、それに死んだと思っていた父—を取り戻す。父の財産によって彼は、パトロンなどの他人に依存せず、また働かずとも経済的に暮せることになり、二重の意味で “independent” になる。

最後の上昇は決して唐突なものではない。一見それは唐突である。しかし我々読者は長い間主人公に次々と訪れる不運につきあってきて、それによる沈鬱さがしこりのようなものとなって胸の中に堆積している。それに最早耐えきれなくなったところに Bowling が幸福の第一陣としてやって来る。それに加えて、我々はいつか happy end が訪れることを〈知って〉いる。もうそろそろだろう、と思うのだ。我々が心理的に要求しているまさにその時に上昇が起こる。このために我々は唐突さを唐突さとして感じない。

III

さて、以上追って来たパターンは、作中に挿入される Melopoyne の話にも特徴的に現れており、それは例えば次のような言葉に見られる。

Precipitated in this manner, from *the highest pinnacle* of hope, to *the*

abyss of despondence, I was ready to sink under the burthen of my affliction; (p. 394)

つまり、そのパターンとは、pinnacle と abyss を交互に体験する主人公に起こる transition によって形成されている。この小説は、三つの大きな pinnacle を持つ。それは順番に、ロンドン、小説の中央、Strap との再会の部分である。上下反転運動が繰り返されながらも全体は確実に、監獄の場面向かって下降していく。

さらにこの上下反転運動は二重のものである。つまり外的な境遇や主人公の気持ちの変化に隠れて、逆向きのベクトルを持った内面の道徳や感情が存在し、それが外面と対称になった上下運動を繰り返し、同時に外面に対して影響を与える、という構造を持つのだ。最後に、この構造の分析を試みたい。

まず第一に、18世紀に特徴的でこの作品に繰り返し見られる、と Boucé の指摘する reality と appearance の分裂という問題が、この二重性を持つ構造と深く関わりあっている。例えば、Horace を誦んずる該博な宿屋の主人が実は追いはぎ同然の高い勘定をふっかける山師である、というエピソードが語ってくれるように、ある人や事柄の見せかけは内面の正しい真実を伝えていないことが多い。このような問題意識を持った Smollett が全体の構造を上述のような二重のものにするのはさほど困難なことではなかっただろう。この二重性を生んでいる中心的なものは真実と見せかけのギャップなのであるから。

相反する外見と現実がある、というのは不安定な状況であって、それは崩れざるを得ない。小説は常に不安定さを持ち、安定感を求めながら前へ前へと進む。これは換言すれば、Smollett がこのような不確定さを自然だと考えていない、ということである。二番目にこの構造が我々に教えてくれるのは、Smollett の持つ平衡感覚である。彼の窮極的な目的は、失なわれた平衡の、つまり秩序の回復—具体的に言えば、例えば Roderick における「紳士」の回復—なのだ。

このことをわかりにくくしている原因は、Smollett が golden mean の理想を念頭におきながらも、極端な状況を描くのに憑かれており、世界が平衡を取り戻した後の状態には何ら関心がない—これは「結婚」が習慣的に小説の最後におかれ、それ以後の生活は当然描かれなかった事情を考慮に入れてもそうである—ように見えるところにある。しかしやはり、上昇の次には必ず下降を置く、という風にして互いの効果を相殺させる構造を見ると、我々は Smollett のバランスのとれた世界観を思わざるを得ない。

この小説を通して存在する不安定さに、I. C. Ross は注目しながらも、彼はその原因を作中の因果関係の欠如に求めている。¹²⁾ 私は上に述べた様に別のところに原因を見ているし、因果関係がない、というのにも反対である。因果関係は、読者の心理の中には確かに存在している。主人公が上昇や墜落を経験するのは、前段階の彼の持つ道徳・感情などに対する報酬、もしくは罰としてである。

報酬や罰を与えるのは人間でなく神だ。その意味で、この作品は近代市民社会に生きる個人としての人間の意志よりも、神の摂理という名の偶然が支配するロマンスの世界に近い。¹³⁾ 上下運動の因果関係、つまり論理的連関の鍵は神が握っているのだ。このことを物語るがごとく、ノベル的色彩がより濃厚になっていく次作 *Peregrine Pickle* では、二重逆転的構成はかなり解体している。

しかしもちろん、神の摂理は正当なもの、合理的なものとは限らない。神が完全にこの小説を支配するなら、どんなに運命の逆転が不自然で唐突であっても読者は文句を言えないはずである。ところが、再び序文に戻るなら、この「不自然さ」「唐突さ」は Smollett の最も忌み嫌うものであった。更に言うなら、彼は多くの18世紀の作家たちと同じく、probabilityを尊んだ(p. xlv)。だからこそ彼は偶然と神の介入による不自然さを柔らげるために、この作品を私がこの論文で追って来た構造によって作ったのだ。これは、私が〈あたかも……のように感じる〉という表現を繰り返し使ったように、我々を騙す装置である。騙そうとする Smollett の意識はかな

り近代的なものと言える。偶然を用いながらも因果関係をストーリーの中に作りだそうとするこの小説は、過去のロマンスと未来のノベルをつなぐ変遷期のものであった。¹⁴⁾ より近代的な意識で作られる第二作が書かれるのは3年後のことだが、この作品は別の機会に論じたい。

注

- 1) Tobias Smollett, *Roderick Random* ("Oxford English Novels"; London: Oxford Univ. Press, 1979), pp. xlv-xlv. 以後の引用はすべてこの版により、頁数のみで示す。なお引用中のイタリックはすべて私のものである。
- 2) Damian Grant, "Roderick Random: Language as Projectile", *Smollett; Author of the First Distinction*, ed. Alan Bold (London: Vision and Barnes & Noble, 1982), p. 145.
- 3) John M. Warner, "Smollett's development as a Novelist", *Novel*, v, no. 2 (1972), p. 150.
- 4) George M. Kahrl, *Tobias Smollett: Traveler-Novelist* (New York: Octagon Books, 1978), p. 25.
- 5) Walter Allen, *The English Novel* (Harmondsworth: Penguin Books, 1958), p. 70.
- 6) Robert Alter, *Rogue's Progress* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1964), p. 71.
- 7) Paul Fussell, *The Rhetorical World of Augustan Humanism* (London: Clarendon Press-Oxford, 1965), p. 275.
- 8) Paul-Gabriel Boucé, *The Novels of Tobias Smollett* (London: Longman, 1976), p. 142.
- 9) Le Sage がこのような構造を意識していたことは、例えば次のような言葉によってわかる。Le Sage, *Gil Blas de Santillane* ("Collection Folio", Gallimard, 1973), vol. II, pp. 66-67: "Ah! que de passages de la douleur à la joie, et de la joie à la douleur! Quelle succession bizarre de disgrâces et de prospérités!" p. 204: "Il ne faut pas être si sensible aux traverses de la vie. Vous êtes jeune. Après ce temps-ci vous en verrez un autre."
- 10) Douglas Brooks, *Number and Pattern in the Eighteenth-Century Novel* (London: R. K. P., 1973), chap. vi.
- 11) Boucé, op. cit., p. 114.
- 12) Ian C. Ross, "Language, Structure and Vision in Smollett's *Roderick Random*", *Études Anglaises*, xxxi (1978), pp. 52-63.

- 13) Cf. Melvyn New, "'The Grease of God': The Form of Eighteenth-century English Fiction", *PMLA*, xci (1976), p. 238: "That is to say, it is readily apparent in reading Smollett, for example, that "elements" of the romance and of satire persist in his fictions, while "novelistic" elements also become evident."
- 14) Cf. Ian Watt, *The Rise of the Novel* (Harmondsworth: Penguin Books, 1963), p. 24: "The novel's plot is also distinguished from the most previous fiction by its use of past experience as the cause of present action: a causal connection operating through time replaces the reliance of earlier narratives on disguises and coincidences. . . ."